

計算としての論理学と「反省」の関係

ヘーゲル『大論理学』における判断・推論に即して

岡崎秀二郎(東京大学)

我々が自らの思考を振り返るとき、そこにはどのような特有の活動があるのだろうか。例えば何かを話したり、ものを書いたりする場合を想定してみるならば、そこで働いている思考には、少なくとも何らかの「概念」使用が常に伴われているとすることができる。それではこの問いを転倒させて、われわれが何らかの「概念」を用いているとき、そこには常に我々が自らの「思考」であると呼びうる活動が働いていると言えるだろうか。極端な例を用いるのであれば、コンピュータ上に実現される人工知能は、「1」と「0」という基本的な概念に基づいた算術的ないし論理的演算によって、(もはやそうした単純な概念に由来するとは思えないほど複雑な仕方)で我々人間の思考を模倣しようとする。そうした知能の取り扱いに悩まされる現代の我々にとっても、「概念」の使用が即人間の思考を意味するのかという問いは決して無意味ではないように思われる。

ここでG.W.F.ヘーゲルの『大論理学(Wissenschaft der Logik)』で掲げられている論理学へと目を移してみると、そこには、機械的な演算へと人間の論理を還元しようとする試みからは峻別されたものとしてその論理学を構想しようとする特徴的な姿勢を見いだすことができる。例えばヘーゲルは、ライプニッツの元に見られるような、数学的な演算の方法によって、推論が取りうる配列の種類を導き出した手法に対して、次のような評価を下している。すなわちここでは推論の諸規定があたかもサイコロの目の出方を計算するかのように捉えられている、あるいは「理性的なものが、死んだもの、没概念的なものとして捉えられている」(GW12, 109)。あるいは、より実質的に「推論の関係を計算に従属させることを可能にする、もっとも首尾一貫したやり方」を追及したとされる、ヘーゲルが青年時代テュービンゲンにて接した「プルーケの計算」に対するヘーゲルの否定的評価は、次のようにさらに徹底している。すなわち、「無教養な人が計算によって機械的に、全論理学を伝授せられる」ことを語るその自画自賛の辞は、「論理学の叙述に関する発明について語られるものの最悪のものであろう」(ibid.)。

論理を機械的演算に還元する試みに対するこうしたヘーゲルの批判的叙述は、確かに現代論理学が含んでいるような論理演算に相当するものを射程に収めているわけではない。あるいはこの叙述は、ここでヘーゲルが「数学的推論」と呼ぶ種類の推論を念頭に置くものとして、『精神現象学』から連続する数学的な思考方法全般へと向けられた批判の延長にすぎないものとして解釈することも可能であるかも知れない。だがこうした批判の中には、こうした「機械的」ないし「計算」と呼ばれるような当時の論理学的手法そのものに対してのヘーゲル独自の洞察が含まれており、またそれが単なる一面的な批判に終始しているわけではないということもまた否定できない。

例えば「プルーケの計算」は、個別・特殊・普遍という「概念」に伴われる包含関係を捨象して、あらゆる種類の判断を、主語と述語の抽象的な同一性関係へと還元しようとする試みである。具体的に言えば「バラは赤い」という判断は、伝統的論理学が想定するように個別的存在である「バラ」に、普遍的な述語である「赤

い」という述語が内属させられる関係を表現するのではない。その判断の述語はそのように何らかの無規定な「赤さ」を意味するのではなく、「バラ」に関して規定された「赤さ」を意味せねばならない。その結果「バラは赤い」という判断は、「バラはバラの色を持つ」という、バラが持つ色の観点から見たトートロジカルな同一的判断へと還元される。ヘーゲルの論述の中で特徴的であるのは、一方で彼が機械的として批判するところの、あらゆる判断を抽象的な同一性関係へと還元するこうした考えを、自らの判断論の中に、それもヘーゲルが固有の思惟を表現する「反省」が担う判断を導く前段階として取り込んでいることである。本発表ではこうした機械的ないし計算としての論理学に対するヘーゲルの両義的な態度を踏まえて、ヘーゲルが人間の思惟にとって固有と考える「反省」とそれがどのような関係にあるのかを考察したいと考えている。

GW: Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. 1968-. *Gesammelte Werke, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner Verlag.